

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770057

研究課題名(和文)1980年代から2000年代の少女マンガにおける若年女性表象の表象文化論的研究

研究課題名(英文)A Study of the Representation of Young Women in Shojo Manga from the 1980s to the 2000s

研究代表者

杉本 章吾 (SUGIMOTO, Shogo)

筑波大学・人文社会系・特任研究員

研究者番号：00648719

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本において高度消費社会体制の確立した1980年代から2000年代までの少女マンガ誌における若年女性表象の特徴と変遷過程を分析した。若年女性に関する多様な文化表象が乱立していくなか、「少女」という伝統的な若年女性像の橋頭保であった少女マンガが、少女文化の外部において生成された若年女性像をいかにして排除/受容しながら、「少女」像を解体/再構築していったのか、一次資料・二次資料の綿密な収集・整理のうえで、同時代の文化的言説、社会的環境、マンガ史的文脈、出版社のマーケティング戦略などを参照しながら明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study examined how the representation of young women in Shojo Manga changed from the 1980s to the 2000s, a period during which Japan completely transformed into an advanced consumer society. In this era, young women were subdivided into various cultural groups and their representations were diversified. By researching both primary and secondary material and referring to contemporary cultural background, social situation, Japanese manga history, and publishers' marketing strategy, this study successfully explored how these cultural situations surrounding young women influenced Shojo Manga, which formerly represented typical images of girls (shojo).

研究分野：戦後日本大衆文化

キーワード：少女マンガ 戦後女性メディア文化 マンガ研究 表象文化論

1. 研究開始当初の背景

戦後日本において高度消費社会体制が確立する1980年に前後して、少女をめぐる文化的・社会的状況は大きく変化していた。すなわち、この時代には「かわいい」に代表される「少女」的な感性や想像力が社会一般へと浸潤する一方、資本によるマーケティング戦略やセグメント化の結果、若年女性内部の趣味の細分化や文化集団の多様化が大規模に進んでいったのである。少女と社会をめぐるこうした相互還流的な力学は、とりわけ90年代から2000年代にかけて「コギャル」「ギャル」「不思議ちゃん」など、若年女性をめぐる多様な文化表象を生み出すこととなる。

しかしながら、これまでの少女マンガ研究においてこうした消費文化の爛熟に伴う若年女性文化のセグメント化という同時代的文脈はさほど重視されてこなかったといえる。この点において、本研究は、従来の「少女」概念の橋頭保であった少女マンガが少女文化の外部において生成された若年女性表象と衝突・融合しながら変容していく動態的な過程を明らかにすることを企図して開始されたものである。

2. 研究の目的

(1) 1980年代以降の少女マンガが、新たな若年女性表象を受容/排除していくなかで、「少女」という概念を再構築/変容していく過程を明らかにする。それにより、戦後日本において「少女」概念を構築・規範化する文化装置として機能してきた少女マンガが、高度消費社会体制においてどのように変容していったのか、その諸相が判明することとなる。

(2) 少女マンガにおいて若年女性表象が生産され消費されていくなかで、出版社のマーケティング戦略、若年女性の趣味の細分化、ファッション誌の興隆などの要素がいかなるかたちで関与していったのか、文化生産・消費の「場」が編成されていく社会的過程や構造を解明する。

(3) 1980年代から2000年代の少女マンガというジャンル全体の動向と変容を明らかにする。ただし、その射程とする調査範囲と作業量は甚大なものため、より具体的には1980年代から2000年代にかけて『りぼん』(集英社)『なかよし』(講談社)『ちゃお』(小学館)など、小学生向け少女マンガ誌において生成された若年女性表象に焦点を当てる。小学生誌に焦点を絞る理由は、高年齢向けの少女マンガ誌と比べて小学生誌は教育的側面が強く、性愛的要素に関しても抑圧的であるからであり、「少女」の規範的価値がもっとも色濃く抽出されるからである。

(4) 少女マンガを多様な社会的・文化的力学が交差・接合・対立する表象空間としてとらえ直す、新たな少女マンガ研究の方法論を構築する。

3. 研究の方法

(1) 一次資料に掲載されたマンガ・記事・読者投稿などを網羅的にリストアップする。

(2) 一次資料から析出した若年女性表象を、主にファッションと性愛への態度を基準に分類する。まず、少女マンガにおいてファッションは、作中人物の趣味や文化的集団を可視化する、視覚的記号としての意味合いを強く持っており、作中人物の服装やファッションを嗜好別に分類することで、その人物がどのようなタイプの若年女性として想定されているのか、分類することが可能となる。

つぎに重要となるのが、性愛への態度である。本研究では、「少女」概念から排除された「性愛」という要素がこの時代どのように表現されたのか/されなかったのか、そして、それらがどのように価値づけられていったのか、性愛に関する作中人物の態度や描写をもとに、若年女性表象を分類する。

最後に、両者を組み合わせることで、小学生向け少女マンガ誌において、いかなる若年女性表象が生成され、それがどのように価値づけられていったのか、この時代における特徴と変遷、雑誌や出版社による特色の違いを明らかにする。

(3) さらに、こうして調査・整理・分類した資料に基づき、1980年代から2000年代にかけて、新たな若年女性表象を受容/排除していくなかで、小学生向けの少女マンガ誌がいかにして「少女」という概念を再構築/変容していったのか、その過程と文化的布置を分析する。分析に際しては、マンガの表現分析、マンガ史研究を基盤とした歴史分析とともに、新資料の発掘や同時代状況の再検証などの同時代分析、雑誌の読者投稿欄に着目した受容分析を組み合わせ、表象文化的視座から「少女」という概念・表象が生産・受容されていく諸相を明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、高度消費社会の進展に伴って若年女性の文化集団が細分化されていった1980年代から2000年代にかけて、小学生を主要な読者層とする少女マンガ誌においていかなる若年女性像が表象され、また、それがいかにして変容していったのか、表象文化的視座から検討を重ねてきた。

とりわけ、1980年代に徐々に顕在化してきた若年女性の趣味の細分化・分断は、若年女性向け雑誌のセグメント化や郊外化の進展、

都市空間への若者の流入などの文化的・社会的環境の変容に伴い、1990年代に入るとそれまで以上に進行することとなる。そのなかで、高校生を中心としたハイティーン層では、『egg』や『Cawaii!』を筆頭とするコギャル雑誌や、サブカルチャー誌『宝島』から派生した『CUTiE』など、従来の「少女」向けメディアとは異なる文化的系譜に属する雑誌が次々と創刊され、若年女性文化の多様化は加速度的に進展していった。

こうした時代背景のなかで、本研究が注目したのは、ギャル/コギャル系文化と不思議系文化という1990年代以降のサブカルチャーの潮流が少女マンガに受容/排除され、変容していく過程であった。そのなかで得られた知見を以下に概観する。

(1)コギャル文化の受容と変容

まず、小学生向け少女マンガ誌におけるコギャル受容の初期段階に顕著であるのは、享乐的で性的に放埒な若年女性であるコギャルを「少女」の劣位に序列化し、「少女」的な美德を顕揚するための対比項として利用する点にあった。すなわち、当時メディアによって問題化されていたコギャルは、纯粹・無垢・可憐などを符牒とする「少女」像の正統性を補強するための否定的な媒介項として利用されていったのである。

ただし、少女マンガの人气が徐々に下降線を描き出した1990年代後半には、若年女性層におけるコギャル人気はもはや無視できなくなっていたと思われる。結果、90年代末にはコギャルを肯定的に表象する作品も登場するようになる。その代表的な作品が藤井みほな「GALS!」である。この作品は、『りぼん』においてコギャルが主人公に据えられた最初の作品であるが、ここでは、コギャル文化圏に関する最新のファッションや情報を啓蒙するとともに、若年女性に主体的・能動的な力を付与する根拠としてコギャル像が肯定的に転用されていた。

ただし、否定的であろうと肯定的であろうと、小学生向け少女マンガ誌に一貫するのは、「純潔規範」と抵触する過度のセクシュアリティを徹底して排除していようとする姿勢であった。

(2)不思議系文化の受容

他方、1990年代半ばには不思議系文化もまた興隆を迎えることとなる。とりわけ、ストリートカルチャーと共振する個性的なファッションやサブカルチャーを積極的に掲載していた『CUTiE』は、コギャル文化と対立的なオルタナティブな文化圏を編成する中心的なメディアであった。

こうした『CUTiE』を中心とした不思議系文化も1990年代に徐々に少女マンガへと浸透していくこととなる。その最も顕著な例が矢沢あい「ご近所物語」であった。この作品では明らかに『CUTiE』的な文化圏が参照点に設けられており、「個性化」への志向、「クリエイティブ」な職業への憧憬、サブカルチ

ュラルなファッションなど、『CUTiE』に顕著な意匠が積極的に導入されている。それは、主人公に「乙女チック」な少女像には希薄な自己実現への欲望や主体的な「夢」を付与する根拠として作用するとともに、小学生読者にファッションへの興味や関心を喚起する契機として作用していた。とりわけ、テキストに表象されるサブカルチュラルな衣服の数々は、読者から多大な関心を呼び、読者投稿欄やイラスト応募を見ても、読者がこうした視覚的意匠に高い関心を示していたかが明らかとなった。

(3)『ちやお』のファッション戦略と総合誌化

こうした、小学生読者層におけるファッションや外見の修辭への関心は、明らかに1990年代後半から2000年代にかけて増加しており、ナルミヤなどのアパレル・ブランドの興隆、女子向けコスメやファッション誌の人氣など、小学生を取り巻く文化環境はファッションを主軸として大きく転回していった。

この点でとりわけ注目し値するのが『ちやお』である。『りぼん』『なかよし』の後発誌としてスタートした『ちやお』は、1990年代ンまで両誌の圧倒的な人氣の前に後塵を拝していたが、2000年代に入ると、ファッションに関する記事・ブランド・イベントを次々と企画・編成していくようになる。読者モデルの公開オーディション制度や「ちやおスタイル」という独自ブランドの確立、さらにはその実売店である「ちやおスタイルショップ」の設立など、『ちやお』は読者に対して自身の外見や生活空間を飾り立て、消費文化に参与するための様々な仕掛けを誌面の内外に配備し、マンガ誌から総合誌へと徐々に変容を遂げていった。

マンガ・テキストにおいても、付録や読者投稿欄との連関、副次的テキストやメディア・イベントの拡充など、マンガ・テキストとその外部を有機的に関連づけるとともに、ファッションや美容を題材とした作品を数多くの掲載することで、『ちやお』は少女マンガ誌において第一位の座を確立することとなる。

こうした戦略の一環として『ちやお』では、2000年代に興隆したギャル文化を題材とした作品も登場するようになる。その典型が和央明「姫ギャル・パラダイス」である。「姫ギャル」という少女趣味とも通底する新たなギャル文化を参照したこの作品では、ギャル文化独自のメイクやファッションなど、「かわいさ」を喚起する視覚的な意匠が画面の表層レベルにおいて過剰なまでに前景化される一方、姫ギャルというサブカルチャーを枠づけている社会的・心理的文脈は、徹底して無化されていた。

こうした「かわいさ」に特化した表象戦略は、実のところ『ちやお』自身の編集方針とも密接に関連していた。すなわち、2000年代を通して『ちやお』は、誌面の内外において

様々な特集企画やメディアミックス、メディアイベントを敢行していったが、それを統辞するのが「かわいい」という「女の子」的美学であったのである。それは、若年女性向け文化メディアの乱立、小学生層におけるファッションに対する関心の高まり、小学生向け消費文化の多様化といった文化・社会的環境への対応策であったが、それと同時に現代日本において進行する少女マンガの位相転換の一端を照射するものでもあった。

以上のように、本研究は1980年代から2000年代までの小学生向け少女マンガ誌の綿密な調査のうえで、とりわけ、90年代以降顕著となる若年女性文化の細分化と分断という文化的環境の変容がいかんして少女マンガというメディアに影響を与えていったのか、包括的視点から検討を重ねてきた。こうした本研究の成果は、少女マンガ研究や少女史研究のみならず、今後若年女性を対象とするメディア研究、ジェンダー論、サブカルチャー研究、ファッション研究などにも及ぶことが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

杉本章吾「少女マンガにおける「コギャル」の表象誌」『日本言語文化』34号、pp.301-320、2016年4月、査読あり。

杉本章吾「若年女性を象る線とイメージの所在 古屋兎丸、類型と引用」『ユリイカ』48巻5号、(青土社)2016年2月、pp.136-142、査読なし(依頼原稿)。

杉本章吾「少女マンガ誌から少女向け総合誌への変容 2000年代以降の『ちゃお』における少女マンガの位相」『文藝言語研究 文藝編』第68号、pp.1-30、2015年9月、査読あり。

杉本章吾「『りぼん』における「コギャル」の受容と変容 藤井みほな「GALS!」を中心に」『文藝言語研究 文藝編』第66号、pp.33-60、2014年10月、査読あり。

杉本章吾「矢沢あい「ご近所物語」における若年女性のセグメント化と「少女」の再構築」『文藝言語研究 文藝編』第65号、pp.37-66、2014年3月、査読あり。

[学会発表](計3件)

杉本章吾「昭和40年代のマンガ入門書における描画理念の変遷」筑波大学比較・理論文学会2015年度年次大会、2016年2月20日、於：筑波大学(茨城県つくば市)。

杉本章吾「少女マンガにおける「コギャル」の表象誌」韓国日本語文化学会2015年度秋季国際学術大会、2015年11月7日、於：高麗大学(ソウル・韓国)。

杉本章吾「『りぼん』のなかのコギャル 藤井みほな「GALS!」論」日本マンガ学会第14回大会、2014年6月28日、於：京都精華大学(京都府京都市)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉本章吾(SUGIMOTO, Shogo)

筑波大学・人文社会系・特任研究員

研究者番号：00648719